

## 第 57 回 日本木材学会賞 (2016 年度)

「木材細胞壁の形成機構の解明と樹種識別の高度化に関する研究」

安部 久 (国立研究開発法人森林総合研究所)

このたびは、栄ある日本木材学会賞を授与されたこと、大変光栄に思っています。推薦してくださいました森林総合研究所の木口実研究ディレクターをはじめ、審査・選考に関わられた木材学会関係者の皆様に対して、厚く御礼を申し上げます。

私は北海道大学の木材理学講座に所属し、深澤和三先生 (北大名誉教授)、大谷諄先生 (故人)、船田良先生 (現在東京農工大教授) に指導を受けておりました。最初の研究は、電界放出型走査電子顕微鏡を用いたセルロースマイクロフィブリルの堆積過程を調べる研究でした。卒業論文のテーマでしたが、先行研究を参考にして研究を進めました。その後、大学院に進んだ頃はまだバブルの時代で、大学院に進学する学生もおらず、佐野雄三先生 (現在北大教授) が唯一の先輩でした。しかし、その佐野先生も私が大学院に入ると同時に研究室の助手に採用され、私にとってロールモデル不在の状況となってしまいました。そんな中、当時指導教官だった大谷先生から、「手を止めてもいいから、とりあえず出た結果はまとめて論文にしてください」と指導を受けました。おそらく、この教えが私の研究者人生の土台となっているように思えます。どんないい結果を出しても、論文として発表して認められなければ、自己満足で終わってしまい意味がない、というものです。当時英文ワープロの存在も知らない私は、日本語ワープロ「一太郎」で英語の原稿を書いて、大谷先生に渡しました。すると大谷先生は週末かけて、それを全部英文ワープロで書き直し、私に渡して下さいました。この時の先生への尊敬と感謝の気持ちは今でも胸の中に残っております。学位を頂いて、就職する時に大谷先生から、大学で行った研究を総説として出すようにと言われておりました。

森林総合研究所に就職すると、苗木と人工気象室を使って、環境の変化に対する樹木の生理応答と木材形成に関する研究を行いました。木材形成を相関関係ではなく、因果関係として調べるという実験はかねてからやってみたいと思っていました。水分環境と木材形成に関して一定の成果が出るようになってきました。その後、スウェーデンで木材形成と DNA 発現に関して学び、研究論文も出ていましたが、大谷先生との約束が果たせず、何か胸にとげが刺さっているような気持ちでおりました。そんな折の 2003 年に、大谷先生が急逝されました。私は自分が情けなくなり、悔しくて涙が止まりませんでした。そこから一念発起し、船田先生にもご尽力いただいて、2005 年に総説として出すことができました。

もう一つの大きな思いでは、緒方健先生の「南洋材の識別」の英語版の出版です。スウェーデンから帰国後は、木材の樹種識別の研究に軸足を置きました。特に南洋材の樹種識別は違法伐採問題などで重要性も増してきていましたが、森林総合研究所の先輩である須藤彰司先生、緒方健先生の研究以降、集中して取り組む研究者はいませんでした。当時、外部から南洋材の樹種識別の依頼を受けた際に、私が参考にしていたのが、緒方先生の「南洋材の識別」でした。この本はそのドローイングが的確で分かりやすく、また、東南アジアから輸

入される可能性のある木材をほぼ網羅していました。この本の英訳に、ドローイングに加えて顕微鏡写真を加えて発行するというもので、この名著に著者の一人に名前を入れて頂けることを光栄に思って取り組みました。私は東南アジア材の最新の状況に関する情報と木材試料の収集を行うために、国際農林水産業研究センターに出向しました。緒方先生はご高齢であったことから、私のせいで発行が遅れるということは絶対に避けたいと思い、集中して取り組みました。そして、2008年に「Identification of the timbers of Southeast Asia and the Western Pacific」として海青社から出版されました。制作中には、緒方先生と一緒にマレーシアのサバ州に出張する機会も得られ、よい思い出となっています。緒方先生はサバ州サンダカンの森林研究センターにそれより30年前に長期留学されていたことがあり、町の変わり様に驚いていました。緒方先生の訪問を知った地元ラジオ局が緒方先生に取材に来られました。おそらくその模様はラジオで流されたのだと思います。

現在、私は森林総合研究所のダイバーシティ推進室という部署にも席を置いています。木材学会のダイバーシティ推進委員も務めていたこともあります。結婚当初から妻は夜勤のある助産師という大事な仕事を続けており、私はこれまで周囲の皆様のご理解とご協力があった研究と家庭生活とを両立した生活を送ることができました。また、海外でも研究することができ、視野が広がったと思います。こういった経験を踏まえて、今後は自身の研究を進めるだけでなく、後進のため、様々な視点から学会の発展のためにも尽力していきたいと思えます。今後ともご指導とご鞭撻をよろしく願います。